

The Methodology of Making up for Students' and Teachers' Perceptions Using the Effect of Cooperative learning.

～新学習指導要領を踏まえて～

佐賀県立白石高等学校教諭 石橋 俊

1. 導入

高等学校の新学習指導要領が公示され、幾月か経つ。「授業の全てを英語で行う」などの言葉ばかりが、独り歩きしてしまい、実際どのように授業が変わっていき、それが大学入試合格者増加をスローガンとして掲げている現場にどのような効果をもたらすか、問題は山積みである。また、一部の生徒は大学入試を不安がり、コミュニケーション重視の授業を嫌がっている。グローバル化する社会に通用する生徒を育成する理想主義的考えとは反対に、現場はいかに大学合格者を増やすかという現実主義の考えである。

では、どのようにして新学習指導要領の内容と生徒の見解の溝を埋め、教師と生徒の両方のニーズを満たすことができるのか。私は、学習者どうしが助け合い、グループで教え合いながら英語学習に取り組めばよいのではないかと考えた。また、Interaction を通じてコミュニケーション能力の向上、ひいては学習者の社会性を育成できると思い、グループ授業を展開することに決めた。McDonell (1992) が “...the cooperative classroom is well-suited for second language learners as it enables them to communicate, collaborate, problem-solve, and think critically” (p.224) と示しているように、日本の第二言語学習、即ち、英語学習においても効果があると仮定する。文部科学省 (2009) の新学習指導要領においても「指導方法や指導体制を工夫し、ペアワーク、グループワークなどを適宜取り入れること」(p.116) と書かれているので、日本の英語教育においても十分効果があるかと思われる。

文部科学省 (2009) は「外国語を通して、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考え方を的確に理解したり伝えたりするコミュニケーション能力を養う」(p.110) という目標を掲げている。この目標を土台として、コミュニケーション英語Ⅱでは「聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えについて、話し合うなどして結論をまとめる」(p.111) などが挙げられている。この内容は、グループを使用した debate や discussion を行うことを可能にしている。また、英語表現Ⅱでは、「論点や根拠などを明確にするとともに、文章の構成や図表との関連、表現の工夫などを考えながら書くこと。また、書いた内容を読み返して推敲すること」(p.113) という内容を提示してあり、英作文と peer-revision を可能にしている。

2. 教師と生徒の英語授業に対する見解の違い

では本当に生徒がコミュニケーション重視の授業を望んでいるのだろうか。Brown (2009) が、Horwitz (1990), Kern (1995), Schulz (1996) の研究を通して “...mismatches between FL students' and teachers' expectations can negatively affect the students' satisfaction with the language class and can potentially lead to the discontinuation of study.” (p.46) と述べているように、教師と生徒の授業に対する気持ちが一致していないと、コミュニケーション能力向上はもとより、肝心の学力向上にもつながらない可能性もある。

では、生徒はコミュニケーション中心の授業と、文法や読解中心の授業のどちらを求めているのか。この答えは明瞭に出すことができた。Brown (2009) が “The students seemed to favor a grammar-based approach.” (p.46) と述べているように、やはり生徒は文法や読解を中心とした授業を求めている。私が担当している 160 人にアンケートをとっても、148 人が文法や読解中心の授業であった。その主な理由としては、「大学入試があるから」「大学入試にコミュニケーションの試験はないから」であった。

上記のように、生徒は、自分の将来が大きく左右される大学入試に重きを置いており、活動を嫌がる傾向にある。このように生徒と教員間の需要と供給のバランスが異なっている状態で、受験を意識したコミュニケーション重視の授業を展開するのは、至難の業である。

では、このような状況で新学習指導要領を土台にした、大学入試対策も含む授業を紹介したい。

3. 「英語 I」の実践例

★生徒の活動風景の写真

※ プライバシー保護のため、画像の掲載は控えさせていただきます。

2009 年 4 月当初の質問「英語が好きですか？」では、40 人中 32 人が「あまり好きではない」「嫌い」と答え、その内 17 人が「とても嫌い」と答えた。クラス全体の雰囲気としては、活発な生徒が男女共に 2, 3 名ほどおり、発問の際は彼らが答えることが多い。他の生徒は、それに対してうなずいたりするなどの反応をする。しかし、学習プリント分析や校外模試の点数データ分析から考察した結果、完全に理解している生徒は 6 割であった。そこで、全ての生徒がグループで問題解決を行い、英語を理解できるような授業展開をすることにした。

まず、授業の最初 20 分で教科書の新出単語の確認及び音読（読み合いを含む）、内容の音読を行った後、残りの 30 分でグループ活動と確認を行った。グループにおいては、5 人 1 グループを 8 グループ作り、それぞれに班長・タイムキーパー・ノートテイカー・リサーチャー 2 名の役割を設け、毎回自分たちで役割を変えながら活動を行った。





グループ活動においては、教科書の内容に対する **comprehension** 用の問題、本文を図式化する活動、自分達の意見を書く活動を行っており、答えが全体と一致する問題とそのグループ独自の解答が作れる問題となっている（資料 1）。したがって、**communication** 活動として **discussion** が常に行われる。その際、生徒たちには、どんな小さなことでも、疑問が湧いたらすぐにグループ内の友達に相談するように指示し、話し

合った内容はノートに記入するようにさせた。

教科書の単元がレッスン 1 つごとに 4 つのパートに分けられているので、1 つのレッスンを 5 時間から 6 時間で終了させるようにし、最後の 1 時間～2 時間を **output** 中心にしている。

上記のグループ活動の一環として、教科書の内容を必ず自分の意見の理由や証明として使用することを条件に付け、環境問題やジェンダーなど、様々な問題を **discussion** した。その際、自分の意見とグループの意見の両方を学習プリントに書き込むように指導した。また、意見については、最初は無理に英文で書かせず、メモ程度で書き取らせ、その後きちんとした英文にさせた（資料 2）。

output の時間では、それぞれの意見を書かせるようにした。まずは自力で英作文を行い、その後、**peer-revision** 活動を通して、グループ内で話し合いを行いながら英作文をやり直した。

実践当初は、中学校時とは形式の違う授業で戸惑う生徒もいたが、慣れてくるほどグループ内の話し合いも白熱し、生徒たち自身で授業を行っている印象すら持てた。教員の出番は、授業の最初と最後のみで生徒主体の授業になっていく。また、教科書を利用し、かつ、英作文など大学入試に必要な能力を向上させるための活動であるので、生徒は積極的に **communication** 活動に参加した。特に英語習熟度が低い生徒においては、グループ活動を通して以前よりストレスが少ない状態で英語を理解することができ、問題を協力して解決することで学習に対する意欲が下がることも少なかった。

データ分析としては、過去問題などの対策を一切行うことなく、校外模試の平均点が 4 月初は全体平均 53.8 点に対し 55.8 点（差：2 点）であったが、1 月では全体平均 41.2 点に対し 44.8 点（差：3.6 点）と成績を上げていた。また、英語検定試験においては、例年 1 回の平均合格者が 2 級 2 名、準 2 級 15 名だったのが、2 級 9 名、準 2 級 39 名となり、十分な成果を上げることができた。

また 1 月に行った質問「この 1 年間を通して英語を好きになることが出来ましたか？」に対しては、40 人中 36 人が「好きになった」と答え、その理由として「友達と協力し合うから、何でも相談出来る」「友達の意外な意見が聞けて面白い」「チームで団結して問題を解く達成感がたまらない」などが挙げられた。

また、英作文では総語数や総文数の数え方として、つづりの間違っている語、間違った語が含まれている文、及び、文法が明らかに間違っている文は数に含めず計算すると、効果が明確に表

れた。開始から半年で単語数としては約 17 語増加しており、文数は、2,326 文増加していた。

また、開始から後半は、語彙の間違いが少なくなり、正確に単語や文を書けている生徒が増えた。また、接続詞を使用しているなど、より推敲され洗練された文を書いている。これは、グループでの話し合い際、意識的に自分の英作文をモニターしていると考えられる。

上記のことから、グループ活動により、受験を意識しながら同時に communication 活動を行うことができた。

1. Summarize each paragraph.

2. 内容を図式にしないさい。

2. 教科書を読んで、以下の質問に答えなさい。

A サミアは何学年ですか？
(What grade is Samia in?)

B サミアの村からは何人が学校に行きますか？
(How many student go to school from her village?)

C 学校まで何キロですか？
(How far is it to Samia's school?)

D サミアはなぜ有名なのですか？
(Why is Samia famous among the girls?)

E みんなにとって、サミアはどんな存在ですか？
(What is Samia realized as by other girls?)

F 女の子に、より良い人生をおくらせるために何が重要ですか？
(What is important for making the girl's life better?)

G サミアの夢は何ですか？
(What is Samia's dream?)

Write a Short Composition

Class () No. () Name ()

(左より資料-1, 資料-2)

4. 「英語Ⅱ」の実践例

2010 年の 2 年生で、2009 年に行った「英語Ⅰ」の授業を基本として、更なる展開を行った。文部科学省 (2009) によるとコミュニケーション英語Ⅱにおいて「説明、評論、物語、随筆などについて、速読したり精読したりするなど目的に応じた読み方をする。また、聞き手に伝わるように音読や暗唱を行う」(p.111) と書かれているので、この目標を中心に授業を構成した。

最初の 4 分で速読と true-false 問題を行わせた。その後、ペアで 500 words 書かれている単語リストを持ち、一人 1 分 30 秒で英単語を見ながら日本語訳を言う活動を行った (この 3 つで 10 分使用する)。次に教科書を、15 分間で速読した後の true-false 問題、精読による客観問題を行わせた。その後、グループで、レッスンごとの要約、内容の図式作成を行わせた。この授業展開を 1 時間として毎回行い、1 つのレッスンが終わるごとにそのレッスンの内容と関係する discussion や debate をグループ単位で行わせた。その時、環境問題や国際問題などの時事問題に焦点を当て、参考資料として関連英文を大量に生徒は読むことになる。その後、宿題として lesson report の英作文を行わせた。英作文については前年度と同様、peer-revision を行わせた。

では、これでどのような成果があったのか。英作文では平均総語数 130 words となり、総語数も伸びた。また、discussion や debate を通して、説得させるための技術や反論の仕方を習得し、非常に質の高い内容を書くようになった。また、英会話では、物怖じすることなく、堂々と自分の意見を話せる生徒が増えた。一方大学受験を意識した成績でも、校外模試の過去 5 年間の第 2 学年の平均が 46.1 点に対して、今回は 49.1 点。偏差値を 10 点以上伸ばした生徒が多数

いた。県の統一模試の順位も1年時に3,600番台であった生徒が1,200番台になったり、2,200番台の生徒が900番台になったりと十分に成果を上げている。英語検定試験でも、今まで3年生しか合格していなかった2級にも合格し、さらに全体の約半数が準2級を習得した。受験者ものべ200人を超えるようになった。

また、生徒の意見としても「自然と英語力がついているようだ」「模試の文法や長文を前より理解できるようになった」「面接試験で物怖じしなくなった」と楽しみながら英語を伸ばしている。

5. 「英語Ⅱ」と「英語R」の通年指導の実践例

2009年3年生時の「英語R」で、大学入試との関係性を見ていきたい。まず2年生時、4月当初のアンケート「英語は好きですか？」では、40人中38人が「嫌い」を選んでおり、その内23名が「とても嫌い」と答えた。理由として、「文章の意味が分からない」「単語の意味が分からない」「何を勉強すればよいか分からない」などが挙げられていた。彼らは高校入試の募集定員が割れた時に入学した生徒で、中にはアルファベットを全部書けない生徒やbe動詞などの中学校レベルを理解していない生徒もいた。

授業としては、最初の5分で単語テストを行った後、その単語を使用したcontrolled speechをペアで5分間導入した。その際、Ur and Wright (1992)の本を参考にした。その後、教科書に関連する内容の一般的な質問（例えば、教科書の内容が環境問題だった場合は、「自分がしているエコなこと」などである）をグループで話し合わせた。この時、英語を使用するように強く指導を行った。出てきた意見はメモ程度で書き取らせ、その後全体で発表させた。次に教科書を使用し、グループで内容理解の問題を解かせた。最後に要約を英語で各グループに作らせ、発表させた。最初の1時間を導入、その後4時間を各パート1時間ごとに使用し、最後1時間で各パートの要約をまとめ、更に要約させた英作文を発表をさせた。このように6時間で1つのレッスンを終わらせて行った。これにより、3月に行ったアンケート「英語を好きになりましたか？」では、40人36人が「好きになった」と答えた。その理由としては、「みんなと一緒に勉強したので楽しかった」「みんなと教え合うことで問題を共有できた」「友達だから気軽に分からない箇所を質問できた。」などであった。また、読解力（comprehension）の向上とともに、それに伴った英作文（output）も以前より高度になっていた。成績としても、校内定期試験で1年時に評価3の点数であった生徒が、評価4～5に上がった。校外模試でも学年全体の平均点が上がり、英語検定試験においては、合格率70%であった3級は、100%となり、合格率23.5%だった準2級は45.2%になった。校外模試でも、4月当初の平均点が12点だったのが、11月には21点、1月には36点と確実に伸びていった。

3年時には、上記の授業展開を行うと共に、レッスンごとにLesson reportを書かせる活動を取り入れた。今回は、まず自分一人で問題に取り組み（individual learning）、その後確認のためのグループ活動にしていった。生徒たちは、2年時から慣れていたこともあり、スムーズかつ活発に活動していた。

これにより、前年度まで合格率 7.1%を最高としていた英語検定試験 2 級の合格率が 25.0%となり、生徒たちにも大きな興奮と成果の実感を与えた。また、英語検定試験の受験者が、これまで年間で 50 名程度だったのに対して、100 名を超える生徒が受けるようになり、学校全体が英語一色になった感じがした。大学入試でも、英語や英語教育関係の学科を目指す生徒が増え、もちろん合格していった。

6. まとめ

この学校に着任して 3 年が経とうとしているが、今のところ大小問わず成果を上げているのが事実である。地域の学校ということで必ずしも学力が高いとは言い難い生徒たちに、大学進学に興味を持たせ、自分の将来に希望を持たせることができているのではなかろうかと自負している。もちろん、全員が英語を得意教科として認識させられたわけではないが、英語嫌いの生徒を好きにさせることは出来たであろう。英語教師にとって、このことが一番大切ではないだろうか。しかし、習熟度の低い生徒が多い環境では効果があったと言えるかもしれないが、習熟度の高い生徒にどれほど効果があるかは、これから研究していく必要があるだろう。また、2 年間この方法で英語に取り組んでいる生徒が、来年どのような進路に進んでいくかも追っていく必要があるだろう。このように、引き続き継続していく箇所もあるが、新学習指導要領に沿って、コミュニケーション重視の授業を展開しても、十分に大学入試の対策をすることが可能であり、それどころか英語を使用しながら伸びている自分を感じられ、生徒が自主的に英語を学び始めることが期待できる。

★生徒の活動風景の写真

※ プライバシー保護のため、画像の掲載は控えさせていただきます。

★生徒の活動風景の写真

※ プライバシー保護のため、画像の掲載は控えさせていただきます。

☆学習プリント for lesson 1. Part 1. ☆
Class () No. () Name ()

1. 結婚するなら、日本人と結婚したいですか？外国人と結婚したいですか？
日本人 or 外国人

2. 結婚相手が日本人の場合と外国人の場合の利点・不利点を話し合おう！

【外国人の利点】	【日本人の利点】
【外国人の不利点】	【日本人の不利点】

3. 教科書を読みながら、以下の質問に答えなさい。

～section 1～

A トニーが予想外の行動をとる度に、サオリはどのように感じますか？
(Every time Tony behaves unexpectedly, what does Saori feel?)

B サオリが書いた本は有名になりましたか？ Yes or No
(Was Saori's book turned out to be popular?)

C サオリの書いた本の内容はどんなものですか？
(What kind of book did Saori write?)

D 朝、トニーはサオリに朝食を持ってきてくれますか？ Yes or No
(Does Tony serve Saori breakfast in bed?)

(図-1 グループ活動風景及び学習プリント)

References

- Brown, V. A. (2009) Students' and teachers' perceptions of effective foreign language teaching: A comparison of ideal. *The Modern Language Journal*, 93, i , 46-60.
- Dornyei, Z. (1997) Psychological processes in cooperative language learning: Group dynamics and motivation. *The Modern Language Journal*, 81, 4, 482-493.
- Dornyei, Z. and Murphey, T. (2003) *Group Dynamics in the Language Classroom*. Cambridge University Press.
- Horwitz, E.K. (1990) Attention to the Affective Domain in the Foreign Language Classroom. In S, Magnan(Ed.) *Shifting the Instructional focus on the learner*. Northeast Conference on the Teaching of Foreign Languages.
- Kern, R. (1995) Students and Teachers' beliefs about Language Learning. *Foreign Language Annals*, 28, 71-92.
- Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (2009) *The Course of Study for Lower Secondary School*. Mombukagakusho.
- Schulz, R.A.(1996) Focus on Form in the Foreign Language Classroom: Students' and Teachers' Views on Error Correction and the Role of Grammar. *Foreign Language Annals*, 29, 343-364.
- Ur, P. and Wight, A. (1992) *Five-Minute Activities*. Cambridge University Press.